

徹底的に吟味することは、この場合、わたしには不可能であった。婦人の方のお話には繰り返しも多いが、なるだけその場の感じ情景をくわしく現したいので、お話を抹消しないことにした。

それから、島袋カミさんの記録には、今までに一度もやっていない、島尻へいっしょに避難した近親の、家族構成と、この戦争に於いての犠牲者の表を添加した。二十六名の近親、兄弟と親子だけがいっしょに連れ立って歩いているが、ただ一日の中、それも数時間で、十五名の肉親が、米軍の避難民砲撃で亡くなる。しかも七十歳の老いた父親は、ついて歩けないということで、先に八重瀬岳の壕に置き去られ、肉親と離れて一人で亡くなる。これは孤独で死ぬ老人の心情を察して、哀しい思いを人にいたさしめる。

#### 島袋カミ(四十六歳)

池田では恐ろしくおられないといっていて、壕に入っておったよ。恐くて壕から出ないで、お父さん(夫のこと)たちがそとへ出ていたので、壕のそのことはそこではわからなかった。

二十二日に池田から出て、弁ヶ嶽の下の饑間の前に行つて、それからハブカクジャー(池田から百メートルくらいの距離で与那原町境内寄りの由)の下を通つて東風平へ行ったが、饑間の上でクローラと大音響がした。そこに兵隊の壕があって、兵隊が早く入りなさいといつて壕に入つた。兵隊があなた方はどこへ行くのですかというので、池田の者だが兵隊から危いので南へ早く下りなさいと言われたので東風平に行くところだと言つたら、今は危いから、しばらく

さい、といわれた。それで糸満に越えて行つておるわけ。糸満に行つたのは六月の四日だから、十四日ぐらいあつちにはいた。部落のひとの家にもいたよ。糸満に行つたのは、糸満は少しはいいだろうと思つて行つた。

糸満に行つたら親切だった。わたしたちは田の芋も沢山あるから取つて食べなさいよ、とそこのおばあさんは言つたよ。でも恐いから取りに行かない。担いでいる米を炊いて食べて、そこからはどこへも行かないことにしたよ、どこも戦さは同じだといつて。糸満の町であるかどこか知らないよ、糸満ははじめてだから。人の家におつたが、避難民は、大勢あつちこつちの家にいっぱいたよ。

わたしたちは十人の子供だったが、長男は支那事変に、次男は沖繩で召集されて、三男は徴用されて、わたしたちと歩いたのは七人だったんだよ。

糸満にはそう長くはいなかったよ、十日ぐらい、そこにはぜんぜん出なかつた。しよっちゅう家の中にもこもつて、恐ろしくて出られないよ。男といつては、わたしたちのお父さん(夫)と、ウマナー(お姉さんの意、夫の兄の奥さん)のところも、ヤッチー(夫の兄)はいたが、そのほかは女子供だよ。兄さんのところの神谷小(本家の娘の嫁いだ屋号)のところも女子供ばかり、全部女子供十二人ばかり連れて歩いていたら、わたしたちは。

糸満を出たのは、敵がもうすぐそこまで来ているといつたので、恐くておられなくなつて、喜屋武に行つたんだよ。

喜屋武に行つてからは、壕もさがすことができなくて部落におつたんだね。部落には四、五日いたかね、二、三日しかいなかった

く壕に控えていて弾が止んでからお出なさいと言われて、弾が止んだので、もう大丈夫だから行きなさいと言われて出かけた。

東風平には三、四日おつたよ。木と木の中やどこということなしに、そんなにしておつたが、いさせないようにしたよ。「あなたたちがそこにいると、そこに飛行機から弾落されるから早く通つて行きなさい」と言われた。そうして具志頭の後原へ。昼は歩かれぬい、夜はか歩かん、子供たちも担いで。それだから道の様子も何もわからん、何も見ないよ。二十人くらいなものな、家族みんなつれ立って。歩く時は、たえず恐い気ばかりだよ。後原には一週間ばかりおつた。

五月の五日に後原をたつて、前川ガラガラのところへ行つたら、軍の壕があつたんだよ。兵隊がそこに入つていらつしやいといつたので、そこに可なり長い間おつたんだよ。大家族だから芋を買つて来て、壕の入口で煮て、諸見里といつて大きな家があつたので、皆行つて南京袋のいっばいずつ、買つておつたよ。わたしたちのお父さんは二十貫ずつ買つて担いで来おつた。馬の肉売りもいて、肉も沢山あつたので買つて食べたよ。馬なんかもころして、肉を売りに来おつたんだよ。

それから前川ガラガラの川にいたら大雨が降り出したよ。そうしたらゴウゴウ上の方から音を立て出したと思つたらすぐ水が膝までひたしたんだよ。これは大変と大あわてで上に上つたが、もう少しぐずぐずしていたら流されたよ。その時は、大勢の人が流された。

それで芋も米も買つていた諸見里という家の離れに入つたら、そこも首里から避難民の親戚が大勢来るからあなたがたほかへ行つて下

ろうね。そうしたら飛行機から機銃されてね、あ、ちもこつちも火が落ちて、あの家、この家バラバラ、バラバラ音を立てて燃えたからね。その時、わたしたちは下の家に、お姑さんたちは前の家(離れ)に入っていたが、わたしたちは家の中におられないので、出て木の下に立っておると、わたしたちのお姑さんと、タルー叔父さん(島袋さんの夫の弟のこと、三男叔父さん)の次男もよし子もこの三人が焼けおるわけよ。石の柱が倒れて、それに下敷きになつて。お兄さんはそれを見ると、「さあ、みんな、へい、へい」といって、その石の柱をおこして助けようというのだが、これがどうにもできるかね、火の中だもの。それで三人は石の柱に庄えられたまま。そうしたらわたしたちのお兄さんがだよ、「もう、仕方がない、おばあさまもおられなくなったから、みんなもいっしょにそこへ入れ」と燃える火の中へ入れといつておるわけよ。そうしたらわたしが、「あれ、このお兄さんよ、見る見る燃えている火の中に入れといえば入りますかね、生きれる間は歩くんですよ」といふたよ。そうしてまたよし子(兄さんの末娘、七歳)が「いやよ、わたしなんか火の中に入らないよ、父さんよう、お父さんよう」言つてね。そしてお兄さんは、「ああ、そうか」と言つて、気持がおちついて、庭先の木の下に坐つたわけよ。それから、激しくてそこはいられなかつた。

註、島袋さんは、喜屋武部落の焼かれたのを「機銃されて」といっていられるが、お話による様子から推測して機銃射撃だけではないで、焼夷弾と爆弾の投下が同時に行なわれたと思われる。

戦前、島尻地方では、家の背後の柱に石柱を使用したのがよ

く見うけられたそうである。それで鳥袋さんのお姑さんがたの入っていた建物も、石の柱がつかわれていたようであるが、それが機銃弾が当たったからといって倒れることは考えられない。屋外からの爆風、あるいは艦砲で倒され、お姑さんとその二人の孫が石の柱に圧えられたとしか思われぬ。鳥袋さんは、三人が圧ええられていた石の柱が一つなのか、二つあるいは三つなのか、すでに火がついて焼かれていたように言われ、それは、はっきりわからなかったようである。もし、二つ三つと石柱が倒れていたなら爆弾と推測される。義兄が、へいへいと、気はあせって母親と甥、姪を圧さえている石柱を取り除いて助けようとするのであるが、燃えさかる火の中へ入ることはできないで、心が動転して、みんな火の中へ入れ、と口走る。その気持ちや、凄惨な情景が、鳥袋さんのお話で、ほぼ推察できる。機上からの機銃射撃、焼夷弾、爆弾等、もつといろいろと同時に投下していることには違いないだろう。

そうして、ヒヤーンナイ（大騒ぎ）して、喜屋武岬の方へ駆け足で移動して行った。喜屋武岬の浜には、阿檀林があるね。阿檀林の中のあっちにもこっちにも坐っておるよ。わたしたちの母子は、神谷小（智の神谷ではない智の本家）の家族とユーナの木のところに、本家のお兄さんの家族と離れていたよ。わたしたちのお父さんは、喜屋武の部落から駆け込んで来るとお兄さんたちといっしょに坐って、そうしてそこに機銃が落ちて、いちどにやられているのだ。わたしたちのところへ坐っておればなんでもないのでお兄さんたちと一緒へ行ったら、何が落ちたかわからない（機銃ではなく爆弾だろうと同席の人たちがいう）。破片であつたらうね、片方

のお尻が全部引き裂かれて、血が出て顔は青ざめるよ。またわたしたちのウマニーは、トンタチー（両膝を前に揃えて折り曲げ、お尻は地面につけずにしやがむこと。この坐り方、他府県には見られず、南風の風習との説を聞いたことがある）しておったんだね。すぐ左のガマク（腰）に破片がたたき込まれて、もう一言の声もなくそのまま。また、樽ヤッチー小の長男はね、こっち（右肩）がはね起されていたよ、「もうわたくしは素立てで、貰った甲斐もない」と言ったよ。それは見るよ、いっしょにいるんだもの。

喜屋武部落から、喜屋武岬に来るのを飛行機から見ているんだよね。それは、大変だったよ、バラバラ、バラバラはげしかった。そこで何人やられたかね、三男お叔父さんたちのよし子、文子、菊子、わたしたちのお父さん、お姉さん、宗信、イントウ（夫の妹）たち夫婦と子供二人、八名亡くなっている。

それから飛行機が飛ばなくなったから、浜辺に下りながら、持っておる被服類から毛布を取ってうち被せたわけだよ、おるだけに。うち被せたからもうこれはこのままだということだね。

浜へ下りて、壕さがして入ったよ。三つの家族が別べつに入っておったんだ。イントウたちはあつちの方（イントウは鳥袋さんの夫の妹だが、その夫といっしょに死んでいるが、妹の夫とその弟の家族四人）。わたしたちはこっちの方、お兄さんたちはまん中。岩の間の狭いところだからわたしたちは体を縮めてくつき合って坐って眠って、子供たちは横になって、いびきを立てて眠っておった。浜風はビュウビュウ吹いて、子供たちこんなに風に吹かれて眠っては、冷えて大変ではないかなと思っていたが、無難で来てお

たよ。浜には四、五日はおつただろうよ。わたしたちの今教員しておるものが、甘蔗を沢山取って来て、よく食べておたからね。物を煮る時は、飛行機が飛ばない時に、下におりて行って、岩の陰で、着物で上から被うてね、夜になると軍艦がずっと浜辺の近くまで来るので、見られては大変だからね。それで壕は小さくて子供たちが足でつき上げるんだよ。姉さん（この場合は、鳥袋さんの長女のこと）と二人は眠ることができなかったよ。それで二人は昼眠っておつたんだが、そうしたらわたしたちの上に艦砲が落ちてね、わたしもおそわれて、姉さんもおさえられているわけだ。ハキサミヨ（驚いた時の感嘆詞）といってわたしたちの子供たちが、叫んだから、もうまた子供たちがやられている。そんなに大声で叫ぶからといって、「お前たちどうしているのだ、そんなに大声で叫んでいたが」といったら、「いや、わたしたちは何でもなかったよ、お母さんがまあまた大事になっておると思ったんだ」というので、わたしたちもお前たちが大変になっておると思ったんだ」といった。

わたしたちの上に艦砲がフラフラして落ちたのよ、眠っておる岩の上に当ったんだよ。わたしたちに艦砲が当たったのではなかったが、眠っておる岩に当ってサラサラ砕けた石が散って、それでこのガマク（腰）はいつも内身の血がこもって、今も残ってこたえるよ。わたしたちの子供が大きく叫んだので、わたしたちのお兄さんは、「さあ、また下の子供たちはやられたわい、こんなに大きく叫ぶのに」と思われたそうだよ。それで飛行機が去って、わたしたちのところへ来られて「お前たちどうなっているか、そんなに大声で叫びおつたが」とおしやった。「何でもなかったんですよ、

わたしが石に圧えられたから、これは大変になったといつてあんなに大きく叫んでいたんですよ」といったんですが、「もうお前たちは大変なことになったと思っていたよ」とおしやった。

敵の軍艦は、沢山海に並んでいたよ。日が暮れるとこっちに来たよ。それでわたしたちは、子供たちもこれだけ引きつれて、歩いて、何も怪我もしないのだが、喜屋武行つたから六月十一日にお父さんがやられて、いっしょに歩いた一門から、一日に十一人やられたよ。そうしたら、わたしたちは捕虜取られた。

捕虜取られる時は手を上げて出たのではなかった。アメリカが、浜辺に幾つも車を並べてあつたんだよ。そうして、「出て来い」、「出て来い」といったからね、そうしたら友軍の兵隊もいっしょだよ、「あなた方はね、こんな大勢の子供たちも連れていのに、手上げて出なさい」と友軍の兵隊がいたので、わたしたちは兵隊のいうのをきいて出たよ。わたしたちは出たら、そこに入っていた友軍の兵隊は、弾にやられて、六人ひっくり返っておつたそうだよ。どうしてこれを見ておるかといえね、わたしたちは捕虜取られて上へ行ったら、他の人たちは食べ物も何も彼も持っているよ。わたしたちの姉さん（長女）と、わたしたちといっしょの田舎の人おねえ、お姉さんわたしたちも行って取って来ましようというので、うんといつて、わたしも澱粉など取りにといつて、わたしたちがいた壕にですね。そうしたら前になっていたのが、「友軍の兵隊がみんな死んで引っくり返っている、それで恐くて何も取らなかった、食べ物だけ持って来たんだ」といったよ。友軍は六人であった。出なかつたからねえ、やられたのだ。元氣な兵隊たちだった

が、わたしたちが上にあがるあいだの、いつときにやられて、その時は大変だったよ。

それから座安、伊良波に行つて、あつちには四日ぐらいいったよ。甘蔗の取ったあとの畑によ、寒くはあるし、雨も降るし、そうして雑話の空きがらに食べ物を煮て食べてねえ。それから十二時前であつたらうね、眠っているのを起こされて、「車に乗れよ」というので、どこへつれて行かれるかと思つておつたんだよ。そうしたら石川につれて行つて、夜明け方なつておつたよ。広っぱに、三、四日放つたらかさされて、今度は太陽に干されて、それからカバ屋（テント小屋）に入れられたが、七十人くらいずつおつたよ。もうそこからはどこにも行かなかつた。それから西原へ。

註、伊良波さん発言 男たちはみんな、何か武器でも持っているかということだったろうか、裸身にされた。女は着物を着せた。その時シャツ一枚貰つたが、それは終生忘れられない有難さだった。

わたしたちもね、後原の姉さんだかね、夫は防衛隊に行つて、姑と子供たち三人だったが、母家は畳も起してあつた。わたしたちを離れに入れてくれた人だがね、「この向かいの畑はわたしたちの球菜だから、取つて来られて召し上りなさいよ、甘蔗も折り取つて、子供たちにおやりなさいよ」といつてね。砂糖もくれてあつたのは一生忘れられない。恩を返しに訪ねて行きたいと思つているんだがね、東風平では追ひ払われてね。

わたしたちは、二人は兵隊に行つてね、十人の家族から七人は島尻に下っているんだね。次男は沖繩で兵隊、長男は支那事変で戦死

極めた米軍の避難民に対する砲撃であつたらしい。

記

鳥袋カミさん(次男家) 家族十名

- ×夫 宗ソ 四十九歳 酉年生 喜屋武岬爆弾死
- 自分 カミ 四十九歳 酉年生
- 長女 秀子 二十八歳 午年生
- ×長男 宗貞 二十五歳 酉年生 支那事変戦死
- ×二男 宗盛 二十一歳 子年生 沖繩現役戦死
- 三男 次郎 二十歳 寅年生 県外徴用復員
- 二女 ツル子 十八歳 辰年生
- 四男 宗盛 十五歳 未年生
- 五男 宗保 十二歳 戌年生
- 六男 宗良 八歳
- 本家の家族
- ×おじいさん 七十四歳 申年生 八重瀬岳で一人残る
- ×おばあさん 七十六歳 午年生 喜屋武部落焼死
- 三郎(お兄さん) 五十四歳 午年生
- ×ウシ(ウマニ) 五十六歳 辰年生 喜屋武岬
- ×宗信 県立一中二学年(四男の息子) 十七歳 喜屋武岬
- ヨシ子 七歳
- 神谷の家族(全滅)
- ×次郎(鳥袋家の簪) 四十三歳 辰年生 喜屋武岬
- ×武戸(次郎妻) 四十四歳 卯年生 喜屋武岬
- ×春子 十七歳 喜屋武岬

した。次男は山部隊だったが、どこで死んだのか、見た人はいない。喜屋武の付近では見たという人がいたが、わたしたちがあつちへ行つた時には、もう人が避難民も兵隊も大勢死んでいったもの、あつちでは。三男も徴用されて、旅に行つていた。十八歳に徴用されて、この引揚げに當つて帰つて来ておるのだから。

石川にいた時何月であつたかね、久高小(屋号)の蒲(人名)がね、「島尻でケ目失した(死んだこと、古語で『古事記』にでている目失すと同じ)のはですね、みんな遺骨取つて来いということがありますよ」といつたから、わたしはお兄さんにつけて、いっしょに行くこと申し上げたが、お兄さんが、女は歩けない、男ばかりで行くから待つていなさい、とおっしゃつたので、わたしは行かなかつたが、お兄さんが余所の人たちといっしょに、遺骨を拾いに行かれて、二日かかつてみんな遺骨を取つて来て、お墓におさめた、と知らして下さつた。うちのお父さんたちは、あの時のまま、みんなちつとも動かされなかつたんだとお兄さんが言われた。

わたしの舅のおじいさんは、八重瀬岳まではいっしょにお伴したが、その時から歩き疲れられてね、亡くなられたそう。わたしたちは翌日、また後原に帰つておるんだからね。

註、鳥袋さんは、喜屋武岬の阿檀林の中で亡くなった人たちの数を八名と言つていられるが、よみ上げた数は、十名である。それで委しく訊いたら下表のように十二名の近親者が一度にいか所で亡くなり、おばあさんが石柱に圧されて焼死された三人を合すと、六月十一日の一日で、十五人の近親を失つている。凄惨を

×スミ子

四歳

喜屋武岬

鳥袋三男家の家族。主人本土在住

- 母(三男の妻)
- ×長女 よし子 二十歳 喜屋武部落焼死
- ×二女 文子 十七歳 喜屋武岬
- ×三女 菊子 十五歳 喜屋武岬
- 長男 宗典 十二歳
- ×二男 七歳 喜屋武部落焼死
- ×四女 すみ子 四歳 喜屋武岬
- 以上

鳥袋家のカミさんがお兄さんと呼んでいる主人、宗ソンさん、男、カミさんの夫、主人は大坂在住、だつた三男、それに妹、四家族がいっしょに最後まで歩いた。そうして沖繩本島の最南端、喜屋武部落、喜屋武岬で、嘆いても嘆き足りない悲劇に遭遇した。

- 四家族の総人員 二十七名。
- 犠牲者数 十六名。
- 生存者数 十一名。

野 田 昌 象 (四十二歳)

防衛隊

防衛隊に取られたのは三月の六日で、浦添の小学校に全部集合しました。西原からは十二名でありましたが、中城、宜野湾の三か村

の防衛隊でありました。体格検査をして、それから自分の着物と軍服と替えさせてから配置しました。一個中隊に四名ずつ。配置するとそこから我如古(宜野湾村)へ、わたしたちは石部隊の四中隊でしたから、そこで訓練して貰いました。手榴弾をどうして投げる、竹槍もどういふようにすると、これを教えてから、戦車といつてありましたが、教えるためにですから竹で戦車の模型をつくりまして、一尺四方くらいの箱に弾が入っていましたよ。それを背中に負いまして、戦車に突っ込みます。そうすると戦車は引っくり返ります。それを教えますから今度は蝟壺を掘りました。蝟壺は野原にも畑にも、どこにも、深さは約四尺くらいですが、そこへ弾を持って入り込んで、投げては引っ込む、というふうな稽古をしました。今度はまた地雷といつてありますよ。五メートルくらい離して埋めます。これは志真志(宜野湾村)から我如古、我如古から棚原(西原村)近くまででありました。こんなにしていて、敵が上陸しましたから、四月の三日でありましたよ、自分たちが志真志から普天間へ攻撃に行ったのは。晩に出かけたら、翌日の朝六時頃に壕に帰って来ます。それを三回繰り返してやったら、はじめは八十七名であったわたしたちの中隊は、二日間にただ三十名しか残りませんで、ほかの人はみんな戦死してしまっただけですね。それから宜野湾村と西原村の境に山がありましたよ。そこは上原部落ですが、棚原の後で、棚原に近いから、棚原の壕といいました。わたしはその壕に四日おりましたが、もう中隊はばらばらになりました。わたしは、普天間の戦争をやつて見て、もうこれは、日本はたしかに負けるんだと考えましたので、隊もばらばらになっていたので、妻子のところ

ね。

この喜屋武・福地には長らくおったね、二十五日ぐらいいかな。わたしはいるところにいっしょにいたのは、あの大里村の大見武の宇座だね、宇座の家族がいたよ。それから、桃原(池田の隣部落)の、あのハワイから帰って来た崎間の家族だね、この崎間の家族は十八日に来て、十九日に家族全員やられた。車座になって夕飯を食いながら全員やられた。一人ひとりの名はわからんが、崎間の家族といふことは知っておった。おじいさんと夫婦と子供が二人、五名全部やられた。来て二日目であったから飯小屋も作ってなかった。原っぱで夕飯を夜食べておる時だね。

またほかの避難民は、大里村の運玉の大見武だね、あっちの宇座の家族でした。宇座の家族たちは、人の家を壊して、そこに飯小屋をつくって入っておったが、これは二十日にみんなやられてしまった。わたしの子供たちと同じ二十日であったね。桃原の崎間の家族がやられたのは日がちがう。みんな十五、六人くらい、一人も残らない。飯小屋にみんなおる時に直撃が落ちて全滅でした。宇座の家族がやられたのは、わたしたちのところへ来てから八日目。おばあさん一人、お父さんお母さん、娘子供二人、五名全滅。わたしとは親戚です。わたしの姉が、宇座の次男の嫁で、次男はうちの婿で、古堅仁王と婿兄弟です。姉はここで、妹は大里で艦砲の直撃でやられた。宇座の家族は、その長男の家族も他の兄弟たちの家族もみんないっしょで、十五、六人でありましたよ。一人も残らなかつた。遺骨はわたしがいっしょに行つて取つて来ました。

古堅の長男はこっち(手で首を示す)全部切られていましたね、

へ逃げて帰りました。

それから自分の部落へ来ましたが、部落の人たちは、まだ相当に残つておりました。それで家族といっしょになって、自分の墓に入つて、この池田には十三日間おりました。

そこでわたしの次男は、破片に当つて死にました。まだ生れて八か月にしかなくなつておりませんが。

池田から大里村の同字(トウジ)でしよう、その壕におりました。わたしは、わたしの妹婿の古堅仁王の家族と二家族いっしょでありましたが、そこで古堅のお母(野国さんの自分の妹のこと)が死んだ。仁王の妻は艦砲の直撃でやられたんです。そうして体はちりぢりばらばらになって、自分たちが集めて、まとめてから葬つて、それから自分たちは逃げたんです。

それから同じ大里村の大城へ行きました。そこには弾薬のある壕がありましたので、そこに入って十五日間過しましたが、山部隊がやつて来たので、そこを出て真直ぐ、喜屋武・福地へ行きました。

喜屋武・福地へ下る時、夜の十一時頃であつたでしょうね、古堅仁王の長女のツル子十二歳なるのがわたしたちと離れて行方不明になつてしまつた。どこへ行つたのか、さがしたがわからないわけ。ずつと行方不明になって、どこで死んだかわからないから遺骨も拾うことはできなかった。行方不明だからどうだったか、ぜんぜんわからない。

喜屋武・福地に行つたら、壕はない。山があつたので、その木の下におりました。そこは二百坪くらいの広さで、拝所のようなところだったろうな。敵は山のうしろで、戦車砲を撃つておるわけだ

わたしの長男とひとところでした。わたしの長男はその時、あれはここ(頭の三分の一くらい上部を掌を水平にして示す)から全部たたき切られていましたね。それから娘三人と、古堅も次男も。

わたしの子供は長男が一番上だね。これが十六、野国昌友、それは頭の半分は全部取られた。古堅の長男は古堅盛輝、十五だつたね、うちの長男より一つ下だから。次男はマツチャン、六歳。長男と次男のまん中が娘、ツル子十三だつたね。これは大里から下る時に、途中で行方不明になつた仁王の長女。

わたしの娘はよし子十二かね、今三十六なる。次女貞子、九歳。三女春子、六歳。四女富子、四歳。静子もわたしの子だよ。これが五女になるんだね。六女が君子、戦争の時は妊娠中だった。これは捕虜になつて後で生れたんだね。今生きておるのは、長女と次女と六女の三人。喜屋武・福地で、三女の春子と四女の富子と五女の静子はやられた。

古堅のマツチャンとうちの娘三人は破片でやられた。夕飯を食べて、木の下に坐つていたんだが、その時戦車砲で。敵は戦車砲をバンバン撃つておるわけ。それで戦車砲で古堅の子とわたしの子供等はやられた。

これ等は五時頃にやられているよなあ。これらを葬つたのは、夜やつたんだよ。夜は弾は撃たなかつた。自分の子供と甥ッ子だから放つては行かれないよな。その向かいには畑があつたわけ。それで畑に持つて行つて、人の家から床板を持つて来て、箱のようにつくつて、上にも床板を置いて、シャベルも人の家から取つて来て、

士を被せた。

避難民でもっと他には、それからあの桃園の大屋徳オウヤイトケだよ、あれは防衛隊だが、わたしを見たので、わたしたちの連中としじゆう離れないわけ。あれは自分ひとりだったが、あれもわたしの子供たちといっしょに木の下に坐っていた。あれは弾に当たらないで、まぬかれて助かったよ。

アメリカの兵隊たちが砲を下ドンドン撃ったので激しくなって、子供等もおらなくなったから、古堅仁王の子供等と自分の子供等を人の畑に持って行って、これ等をひとところに片づけてから、そうしてわたしはひとり、手上げて行って、妻たちもみな、宗盛たちの家族もいっしょだよ。仁王の兄弟だから、宗盛は弟だね、わたしひとり手をあげてアメリカのところへ行ったわけだね。アメリカは裸になっていて、ガムを噛みながら、戦車砲はひっきりなしに撃つんだ。わたしが手を上げて行ったから、これは止めているわけ。喜屋武「福地の山からわたしが出て行ったので。「わたしを殺すならお前たちは、ずっと喜屋武岬へ逃げなさいよ」と振り返って手を上げて言ったのだよ。そうしたら、桃園の大屋徳は、わたしが殺されるのかどうかと見ていたんだよ、殺さなくなると、アメリカたちは、イトマン（糸満）、イトマンというのだよ。そうして糸満へ行けというんだね、手真似で。

それで、あっちに家族がおるから行って連れて来よう、といったら、ノー、ノーという。行くなどいっているんだね。それでみんなはわたしを見ていよね、手を招いて、来い、来いしたから、宗盛たちの家族、わたしの妻と子供も二人は残っておるだろう、そう

きなかったとのことである。姉の方は一家全滅、妹の方は夫だけ残って、母子四人が亡くなった。妹の十二歳の娘が大里村から福地への途中、夜十一時頃に行方不明になり、とうとう最期が不明で、やはりこの世に生存していかぬと思えない哀しい一生も人の心を痛める。

福地へ行かれた時にアメリカの戦車部隊が自分等のいる背後にいて、戦車砲を撃っていたように話されたが、それは、捕虜になる二、三日前との錯覚であろう。二十五、六日福地にいられたといわれるので、捕虜になられたのが六月二十一日だから、福地に野国さんが来られたのは五月の二十五、六日で、その頃はまだ首里も完全に占領されていぬ。五月三十一日に、やっと米軍は南風原に侵入している。戦闘指揮をしていたバググナー中将が戦死したのは六月十八日で、戦死の場所真栄里は、福地の北一キロメートル半程の北方で、福地の東、背面五、六百メートルへアメリカが侵入しているのは六月二十日だから、野国さんが戦車の砲撃を受けたと語っていられるのと一致している。

野国さんの語られた戦車砲について宇久田議員が、御宅の墓の角に打ち込まれているのを記念のためにお墓修理の時も取り除かないでそのままにしてあり、露出部が十センチくらい、弾尾の直径が七センチくらいだが、しかしそれに大中小三通りある由を語られた。

仮小屋にいた宇座家近親十五、六名がひとり残らず全滅した弾が戦車砲であったのかは疑問に思われる、艦砲の炸裂が戦車砲より大量殺戮の弾だったのではなかったか。

して連れだつて来たから、戦車砲撃たなくなつたんだね。わたしが、出て行ったのは、朝、日が出てから、九時頃だっただろうね。糸満へやって行ったら、鉄条網を張り囲らしてあったが、その中へたたくこめて、アメリカたちは小銃を持って、監視していた。そうして、そこで夜を明かして、翌日になったら、十一時頃に車を持って来て、あちこちから捕虜を集めてあるよね、島尻のあちこちから。そうして車に乗せて、今度は北谷の浜につれて行ったわけだよ。またそこで車を乗り換えて、越来へ行った。

捕虜になったのは六月の二十一日で、その日に糸満へ行って、その翌日の二十二日には、越来へ行っておるのだ。

註、野国さんは難聴で、みんなといっしょの座談会の時は、名嘉編集所長が引き出し役だったので敬語を遣ってられるが、引き出しの言葉がよく通じなかったのか、あっさり片づけられて、あまりはつきり語ってられないので、追加録音をお願いすることにした。前区長、現西原村議会議員の宇久田朝秀さん御夫婦のお世話で、宇久田さんのお宅へ他の方もいっしょに集まって頂いた。そうしてわたしたちの質問を、宇久田議員が、繰り返して野国さんの耳へ口を寄せて訊いて下さった。敬語を遣ってられない大部分は心おきない間柄の年長者が年下の者への話しぶりである。

それから野国さん、並に姉賀、妹賀の二家族は実に不運であった。野国さんは戦争中二男五女の七人の子持ちであったが、戦争のために五人の子供を失って、戦後生れた六女と幸いに生き残ることのできた二人の娘と三人の女子はあるが、男子はどうとうである。

野国さんは、こっちの聞き出しにしたがって、いかにもあつさり、ちつとも感情をこめないで話されるので、淡々と記録されているが、もしこの惨劇を委しく記憶して語られたら、懐惨の姿がもつと強く現わされたことだろう。

竹槍訓練の際の竹槍について名嘉所長が訊いたのに、鉄の先をつけない、単なる竹の先を鋭く削っただけだったと答えられた。それで竹槍に二通りあったことがわかった。

宇久田 春子（二十五歳） 主婦

わたしは皆さんのように転でんとしませんでしたけれど、アメリカが上陸して約一か月、二十八日まで池田の壕におりましたので、池田で大変苦しい体験もあつたんです。それは男たちは全部兵隊に行き、徴用に行き、そうしてわたしの父はもう六十八歳になつておりました。父の兄弟なり従兄弟なりが那覇や西原から集まつて、三十名ばかりの大家族なんです。そうしていると大変激しくなつて、水汲みにも行けない状態になつたんです。

その時糸満の方から兵隊さんが大勢こつちに集まつて来てですね、「あなたたち今頃こつちには、島尻の方へ下らないと大変ですよ、明日は総攻撃があつて、本土からも応援に来るんだ」と兵隊さんがいふんですよ。そうして「大攻撃を受けて危いから早く島尻の方へ下りなさい」といふんですよ。その時父がですね、「こんなに、年寄りと女と子供だし、向こう行つても稼がないし、行きながら誰が死んでも振り向きもしないで通つて行く、それでも

行くなら出て行こう」といった父の言葉が心に当って、それではどうしようかなあと思っていたんですね、

そうしておると大勢の人が来てですね、今日は誰がやられた、今日は誰がやられた、というんでね。それから兵隊さんの壕が桃原と池田の間にあったんですから、この友軍の兵隊さんが列をなして、第一線へ出るといった時に、これをトンボが見た場合は、大変だったんです。

わたしたちの壕は太平洋に向かって、距離は大分離れていました。向かい合って、桃原の安谷屋さんという方の家族と石川先生の家族が十七名入っておいりましたがですね。安谷屋さんだけが桃原へ帰って行って来る間に、壕にいた人たちは全滅してですね。あの人が「早く来てくれ、早く来てくれ、どうすればいいかな」と死物狂いになっていた時は、大変だったんですよ。隣の壕には仲伊保の人がいたが、これも全滅になるし、ほんとに大変だねえと思いました。その時は、一歩出たら死ぬ覚悟でなければなりませんでした。それは四月二十五日頃であったと思いますが、安谷屋さんたちの墓口を開けて見たら、坐っておる人も死んでおるんですね、爆風で死んだんだと思います。兵隊も大勢いるので、みんなで墓口を開けて見たら全員が死んでいたんですね。

それからわたしたちがあした島尻の方へ立つという時にですね、島尻の今の南部農林高校の近くの方だったんですが、親一人子一人の青年が、わたしの従妹と婚約ができてくる人だったんです。この青年が水汲みに行つて、足に破片が当って担ぎ込まれて来たが、とても苦しがつて、水飲ましてと繰り返していいますので、これは大

は、「さあ、こっちに休みなさい」といって、老人や子供たちを休まして、そんなにして歩きましたが、東風平村の志多伯部落に来た時に、ちょうど夜明けでありました。四十名くらいがいっしょです。こっちは安全だからといってですね、誰は来ているか、誰もいるか、といったあんばいに、たえず気を配ってですね、ひとりでもはぐれるものがないように、みんなをいっしょに連れて行かねばという気持であったんですね。

それで志多伯で一泊しようということになってですね、ひとの家がありましたから無断で借りたわけですよ。昼中はそこに入っていたらその家主さんがやって来て、いいますことにはですね、「わたしたちは早くここから出て行かないと、わたしたちの家は焼かれるんだが」というんですよ。それで、ここに一日中いるのが大変でしたが、暗くならねば歩けませんからね。「暗くなって歩けるようになったら出て行きますから」といっても、「それなら、ここから一歩も出てはいけません、それから、ここで食べ物も煮てはいけません、火も燃やしてはいけません」という状態だったんですね。

それでうちの父がですね、「もう家族みんな死ぬことになるんだ、死んでいると思っておれよ、死んでも悔みもしない、これが戦世であるから、誰が死んでも絶対悔むこともしないで、後も振り向かないで、前へ向かって行こう」と、父は悲しんでいました。

その夜、糸満に行ったら、照屋（旧兼城村）で兵隊さんに会ったわけです。そうしましたら、「わたしたち池田から来ました、こ

変だとみんな驚いたんですね。この人は一晩中苦しみながら死んだんですけれど、母ひとり息子ひとりのお母さんですから、成長させて頼りにしていたわけですね。このお母さんが悲しむのを見ては、ほんとに気の毒でなりません。戦争というものは、何ともいえない恐ろしいものだと思いますが、こんなに死ぬのならですね、親と子とはいっしょに死ななければいけないとわたしはいつもそう思ったんですが、子供が残ってもいけない、親が残ってもいけない、親戚もみんないっしょに死んだ方がいいと思っただけです。

わたしたちの入っていた壕は、与那原に宮城自動車といって、バスの会社がありまして、そこが作らしてある頑丈な壕でありましたが、兵隊さんが、「あなたたちは糸満にある壕に行きなさい」といって証明を下さったんですね。それでわたしたちは幸いと思つて、糸満へ行くことにしていましたところ、弾薬を乗せて来た荷馬車がありましたので、「年寄り和孩子はこれに乗せて行きなさい」と兵隊さんが親切にいました。兵隊さんはこんな親切なところもあるなと思いました。

それで老人と子供はこの荷車に乗せて、蒲団を被せて行きましたけれども、兼城行きましたらですね、弾薬をそこから折り返し荷車に積んで行くようになったので、あつちで下されたんです。行く途中も弾が来て、蒲団の上にも土が被せられたりして、大変であったんですね。

わたしの父は気が強かったので、みんなに「早く歩けよ」といってですね、また弾の来るぐあいを見て、安全と思うところへ来た時うこうしてこういう方が証明を下さいました」といいましたら、「そうですね、そんならこっちに入りなさい」といった。わたしたちは、志多伯に一昼夜いたただけで、それからあとずつとあつちにおりました。照屋の壕にですね、こっちは機関銃陣地なんです。兵隊さんこっちから出て行って、あいているわけなんです。兵隊さんは病人とか、怪我した人だけしか残っていません。そこは機関銃陣地で、口の方は、糸満から敵が上った時は撃つようにしてですね、奥の方は立派な自然壕が大きくあって野戦病院もつくってあります。

そうして、六月の二十日までこっちにおりました。その間、敵も近寄ってですね、どこか行こうかねと思いましたが、やっぱりもう家族も多いし、分散もできないわけですね。みんな分れたくないといひ、またこれだけのものが入ることのできる壕は、どこへ行っても捜すことはできません。それで照屋の方たちといっしょに入っておりました。周囲は畑ですから野菜なんか取って来たり、また照屋の人が、さあ、わたしたちの畑に行つて芋を掘つて来ようという。こっちから行ったら向こうは全然戦さの気分はしませんでした。静かですね、山原や方ほうに疎開して、糸満の家はすべてがらあきです。そうして、味噌なんか取って来て貰ったりして、それも不自由はありませんでした。

それから六月にはいつてからですね、相当激しくなりました。それでも約百メートルくらい離れている民家で、いつも晩に行つて一日分の御飯をつくつて来て、そういうふうにしていました。わたしは男の子がとて泣き虫で大変でした、数えで三つでしたがね。この子

がいい気嫌の時にはわたしも出て行った。そうでない時には自分の姉たちを出して、わたしは皆の子供を預かりました。

そうして六月の十日頃になったら、アメリカの兵隊さんがあつちこつちから糸満へ入って来ているんです。機関銃口から、戦車なんか通るのも見えるんですね。糸満のかたでとても面白いおぼあさんがいてですね、「おい、そこから山羊の目たちが歩いてるよ」といってみんなに見せていましたよ。山羊の目というのは、アメリカの人の目は山羊の目と似ているというので、アメリカ兵にそういってたんす。おじいさんもおばあさんといっしょで、とても気持ちのいい方たちで、家に行っても何もかも持って来たりしてましたのに、このおじいさんが、家まで行って来ようねといっ出て行ったんですが、それっきり帰って来ませんでした。それでそのおばあさんですね、「わたしたちのおじいさん、もうケー目失まよしておらないよ、家も行って見たが家にもいないが、どこへ行ったかね」といっていました。後でできましたが、途中で弾に当たって死んでしまわれたらしいんですよ。それから、後十日ぐらいで捕虜になるという時に、真栄里の方を向いていましたからね、この壕が。真栄里の方から来る人もあれば行く人もあって、まるで綱引時の人みたいですね。行くのか帰るのか判らないくらい雑鬧ざなうだったんです。向こうの山といったら、今日は起きて見たら真白ましろになり、あした起きて見たら木がぜんぜんないようにですね、木や草がなくなってますね、前の山にはあの落下傘で下りる兵隊さんなんかも見えるんですよ。落下傘で降りる兵隊さんもおったですよ。そ

ていましたが、一度は、民家の方に炊事に行っていた時に、そっちの裏の方に直撃受けてね、二人は壕に入っていて即死した。怪我した人もおりましたけれども、わたしたち家族には怪我したのもなくて捕虜になりました。三十人くらい無疵むしでありました。壕の中は暗いところで、天井が低いのでみんな坐ってますね、鶏窟けいこくでありました。子供たちも泣きましたが泣かすなよ、といっおりました。子供で一番小さいのはわたしの方でありました。

わたしたちがいた壕は、百人以上も入れたと思います。わたしたちが行った時には兵隊が三十人くらいおりましたが、兵隊のいるところは、上から水もチョンチョン落ちて、雨がよく降っていましたので、水には不自由なくやっていたようでありました。この壕が部隊の本部みたようになって、怪我した人もつれて来たり、また余所からも来たり、出たり入ったりしていました。そうして、今日はもう第一線に行くんだといっ四、五名ずつ、いろいろ弾なんかも担いで行く時には、「海行かば」を歌って出て行きましたが、とても悲しかったんです。このようにして出て行った兵隊さんがひとり、横腹を負傷して帰って来ていましたが、西原行かない先の、南風原あたりがとても激しくてみんなその間にやられてしまっ

て、先へ行くことはできなかつたといっしました。それから、その晩出て行って、翌日の夜帰って来ている兵隊さんがいました。怪我して南風原の病院にいたが、送られて来たといっしていました。そうしてこつちで死にました。こんなにしてこの壕で兵隊さんが三人死にました、こつちの病院で。こつちに来る兵隊さんは、疵

れで今日まで生きられるか、明日まで生きられるかわからない、もう死ぬ時はいっしょに死にましようね、とこの糸満のおぼあさんがですね。そうするうちにこつちにビラが入ってますね、何もいらないから、殺さないから早く出て来い、出て来いと書いてあるんですね、防空壕の口から入れたんです。そうしたら、そうはいっても出たら殺すんだといっ誰も出ないわけです。また海の方からも船からマイクで「何も持たないで出て来なさい、食事も上げる、殺しもしない、みんな安全地帯に送るから出て来なさいよ」という声を送るんですね、だけれど日本の兵隊から、「若い人は掴まえられたら散さんな目にあうから」というデマも聞いていたから誰も出ようとはしませんでした。一番最後の日は、外からわたしたちの壕に入ろうとする人たちがアメリカさんに見られて、もうアメリカさんにつかまえられたわけです。早く出ないと弾を撃ち込むから、早く出なさいといわれて、五十名くらいの人が出て行っただけです。友軍の兵隊は全部後方に下って一人もいませんでした。その時に、友軍の兵隊が、こつちにカンバンもあるから皆さんは、こつちからどこにも行かないで、生きられるだけ生きておきなさい、わたしたちは下らなければならぬ義務だから、下るんだからね、どこ行っても同じだ、お味噌なんかもある、これなども食べてどこにも行かないでねおぼあさん、という親切な兵隊さんがいらつしやつたですわね。有難いなと思いつながら、このカンバンを毎日食べてですね、その時、捕虜されたんですよ。

食糧には困りませんでした。水はですね、イヤミ川といっこつちにありますから夜になつてから汲んで来て、そういうふうにしたの浅い人がつきそって来ましたが、民間の人たちも細帯を巻いたりしていました。兵隊さんが、「今度の戦いくさは負け戦だ、敵が強くて敵の陣地へ行くことは出来ない」といっていました。このような兵隊を見ると、自分の弟も防衛隊に行っていますし、夫も兵隊に行っていますので、どこかで会うことがありはしないかと思つたりもしました。

兵隊が残した食糧は粉味噌、カンバンも米なんかもありました。カンバンは大きな金属製の箱が、あと一箱残っていましたので子供たちに、毎日いくつずつというふうにして上げました。壕の上は松なんかも生えておりますから、アメリカの兵隊がおる時もありましたので、「おい、わたしたちの上にアメリカがおるよ」といったりしました。アメリカ軍が来たら一週間ばかりしてから捕虜されました。中は暗いから、そこからは人が入っているのが見えないわけなんですよ（他の人発言「あの時分だつたではないかね、落下傘で下りたというのは」）。赤色や青色でね、わたしたちが捕虜されたのは六月二十日でしたが、それより一日二日前にこんなことがありましたよ。そつちの上が真栄里（国吉か）の部落だときいておりました。今の糸満高校の上の山なんですがね、その方です。こつちはわたしたちが行ってじきは木もいっばいあつて、どこに壕があるか、どこに何があるかわからないくらいでしたが、あの時分から真白ましろなつておりました。向こうの山がですよ、木もぜんぜんなくなつて石も白くなつていました。十七、八日頃からは弾は来ませんでした。わたしたちが捕虜される一週間前頃からアメリカ軍は



入り込んでいましたから攻撃はしませんでしたよ。

捕虜になる時は殺される、殺されないは考えませんでした。ただ一体どこへ連れて行くんだろうと思った。車に乗せられて座安・伊良波へ行った。わたしただけ残っているだろうと思っていたら、もう沢山の人が集まっているんですね。みんな死んだかと思ったらこんな大勢残っておったのね、とその時はじめて沢山人が生き残っておることがわかりました。船に乗って砂辺に、それから野嵩に行きました船に乗ったら、「わたしたち海に沈めに行くのだよ」といって年寄りたちは泣いている人もおりました。わたしは死ぬとか海に棄てられるとかは思いませんで、家族がみんないっしょだからどこへ行ってもいいとそう思いました。ハワイへ連れて行くという人もおれば、海の中に沈めにだそうだという人もおりました。野嵩に着きましたら前に来ていた人たちはみんな配給を貰って落ちついていましたから安心しました。それから古知屋に移されました。わたしは籍が与那原だったんです。与那原の方は、十一月に船越に移動がはじまったんです。それから大城（大里村）に行くと、大見武の方にみんな集まった、与那原は。思いますことはですね、わたしの主人が糸洲で亡くなっておりましたので、わたしの姑と、主人たちを糸洲の方で片づけて下さった方がありまして、その時一番最初に大里に遺骨拾いに行きました。はあ、大変、ほんとに、部落の中の通りなんかですね、人の骨が、石垣と間違えうくらいだったんです。主人は人の家で亡くなっていたので、その人といっしょに行つて遺骨を取って来たんです。母（姉）が直撃で亡くなつて、主人は破片が腹の中を前から後に通つて大変苦しんで死んで

したので、それがわかりました。

それで家族は隣り組といしよで三十四、五名ぐらいたったが、一か所に壕があったから、それだけの人間の食糧確保のために出歩きました。それから、その間は別に大したことなかったんですが四月の十日にですね、その当時八十七歳になる自分のおばあさんが壕で直撃を受けて亡くなったわけです。奇麗好きのおばあさんです、三十余名の集団には、汗臭くて我慢ができません、親戚の連中三名が、壕を別にしておりました。そこにいた三名は全部亡くなりました。

それでその壕に葬つてですね、毎日花を持って行ってやっておったんです。その中にですね、四月の二十日頃から、棚原方面に機銃が聞こえます。それから兵隊が後方へ退いて行きましたね、部隊が。そして野戦病院が二十日頃に後方へ移動したので、そこに長いことおれないなあと思つて、まあ四月二十四日に、三十余名の団体から、僕たち一家は、首里の崎山町に自分の墓があるもんだからそこへ行ったわけです。いっしょだったほかの人たちは、すぐ直接、こつちから上地口へ行ったという。それでこつちの壕を出て登つて行きましたからですね、ここではじめて、兵隊や民間人がたおれているのを見ました。爆風でやられたのか、裸かになっていました。それで犠牲者をはじめて見たので、手を合して行きました。

崎山町の自分の墓には六日間おりました。自分の家族が六名次男叔父さんの家族が四名で十名でした。向こうへ行って翌日の十時頃、隣りの墓に直撃を受けた。そこに十二、三名くらいおつたが、

らしいのです。妹たちは、十三になる子と十一になる子が二人残つていて、わたしたちが古知屋にいました時に祖慶の方へ訪ねて来ましたので、わたしの方で引き取りました。

島尻の方は、ほんとに大変だったと思いましたが、わたしたちはみんな助かりまして、わたしの父は、「誠に御祖先のお陰だ、御祖先さまが守つて下さったのだ」と繰返しがえし言っていました。父は御先祖信心が大変厚かったのです。それで御位牌もずつとお供して、壕の中でも安置して毎日朝も晩もお茶を上げて家族みんな無事にしのがして下さいますようにといつて拝みました。

それから糸洲の壕の入口ですね、さあ、もうここにいられないのに行こうねといつて、もう出ようとする時に蟹が二つ出て来てですね、そこにいます。だからうちの父は、「これは祖先のお使いだ」といってですね、おすの蟹とめすの蟹が出て来たんです。それで父は、「この蟹は神様だぞ、今日はここを出るのを控えて置け」といって、そこを出ませんで、それでここで捕虜されました。

伊良皆 宣 一（三十六歳） 農業

こちら（池田）は、兵隊は歩兵部隊はいませんでね、主に重砲陣地ですね、敵が上陸して四月の半ば頃までは重砲も撃ちましたんですが、あんまりお返しは激しいもんで、重砲陣地も大分やられて、それで四月の十四、五日にはほとんど後方へ引き上げて、砲はもう全部後の方へ下りました。僕等は食糧の補給のために出歩きた

三名は即死、ほかは怪我して助かった。その時、隣近所に人がおつたが、そこへ助けに行かないですよ。それで僕は風邪を引いておつたんだが、見るに見兼ねて、石をはねのけて、救助に当たつたわけです。弾に当たつたら臭いんですね、それで帰つて来てから寒気が酷くなったんです。

そのとき印象に残っているのは、たしかに二十九日の天長節ですが、その晩、識名上空において米国の軽爆が一機落ちた、あれが印象に残っている。友軍の機銃にあつたのか、あの白い軽爆撃機あれが、米軍の飛行機の墜落は最初で最後ではなかったですかね。

それでいっしょの隣り組の方が僕たちのところへ廻つて連れに来たんです。こんなに激しいところについては助からん、自分たちのところは弾も何んにも来ないし、また農作業もやっておるから行こうというんですね。それで上地口に行つたわけです。上地口は多分玉城村になっているのでないですか。島尻はあまり行って見ないのでわからんが、字名ではなくて屋取りみたいではないですかね。

註、上地口は玉城村の部落名ではなく、ある一地方、親慶原に近く、現在軍用地になっている由、あの知念台地付け根の軍用地に入っているようである。

それで行った当時、一日、二日は静かだったです。そこには五月一日から五月二十五日まで、二十四日間おりました、

そこではあんまり激しいこともなくてですね、向こうは高台ですから、那覇の海、また与那原の中城湾が見えなりました。そこで日暮れに、毎日友軍の特攻隊が来るわけですね。あの時は、対空砲火が



花火みたいにとても奇麗だったです。またあの時は陸地にはあんまり弾は来なかったんです。だから特攻隊が来て、燃え上るのは見えませんが、はっきりはわかりませんでした。しかし毎晩それを見ておりました。首里の戦闘は見えませんが。

食糧は、昼、主に芋ですね、芋あさりに出た。また軍の物資集積所に放ったらかしてあるものなども取って来て、食糧を確保していました。一番気になったのはですね、弾に当たって死ぬのは仕方ないが、栄養失調で倒れるのはつまらないと思っていました。芋は盗むのですが、昼ですから人も出歩きません。見つかったら何ともいわずに済みます。

それから船越ですね、船越に二十七日の晩方までいたんです。そこで民家に一泊したんです。これから逆戻りしますが、上地口を立退くとき、糸数の野戦壕とか、向こうから後方に患者が、移動してました。看護婦に支えられるものもおるし、自分で松葉杖をつけているものもおるし、相当の数でした。列をなして、あわれとも思うし、当然とも思いましたね。もう同情心は頭の中から薄れてあんまりありません。あの頃は自分たちもたたかれておるんですから。負傷兵は担架などというのはなくて、歩ける人ばかりしか来ませんでした。

船越で一泊した。そして女子供は置いて、二十七日に新城へ壕さがしに行きました。男は先鋒隊として、向こうで、壕をさらえてですね、洞穴みたいなのをさがした。その壕をカムフラージュして帰って来た。移動する時は夕方です。夕方はちよつとの間弾が止みま

仲座では民家に二日間、そこでは大したことはなかったんです。それから六月五日に波平というところに行きました。それも夜です。ちよつと道を通ったか、はっきりしません。波平でもってですね、昼の十時か十一時頃だったと思いますが、破片でもって手と足をちよつと怪我したわけです。手は左手ですね、まだ破片が入っています。足も左ですね。それはそこに来てから四、五日経ってからと思うんですが、日にちははっきりしません。その時までは、どこへ行っても昼は食糧さがしに出歩いてですね、爆撃するものでもですね、爆弾が落ちるのを見て、戦さというものはこういうものだな、とぐらいにしか感じていませんでしたが、何にも軍というものには無関心だったですな。

しかし人間というものは、一応ちよつともやられると、生への執着というものが出て来ます。生きようという気持ちが出て来るんです。その時、友人の田場というものの妻が、同時刻頃に、壕に入っていて直撃でやられて、子供と共に。その母親が酷い怪我で、無意識のうちに壕から飛び出して、実際にいくら名優でもあまいう芸はできないぐらいに、もう悲惨なんですね。倒れても起きて、また倒れても起きてですね。その時には、戦争というものの恐さを感じてしまいました。それでも、誰れも助けに行く人がいないんだ。それを夫が壕につれて来た。長いこと生きていかなかったんです。二、三日は生きておりました。それでもやっぱし医薬も何もないから手当てもしない、そのままですな。

それと同じ時に、一番可愛想と思っただけですね、母がやられて、既に冷たくなっているんです。その上をですね、多分誕生前

すからね。その時に女子供を連れて行ったんですが、自分等がさがして擬装してあった場所は余所の人が先に入っておるわけですよ。だからそこで悶着が起きたんですよ。しかしもう余りそういさかいをしてもならんからそれを諦めてほかの壕をさがして入ったわけです。ところがその争って入っていた方がたが、その晩でもって全部やられてしまったんです。これはまあ紙一重で助かったという感じがしました。頑張って入っていたら全員がおしまいだったんです。

その晩のことですかね、首里に軍の被服集積場がありましてね、そこが焼けたもんだから、そこから毛布一枚取って持って歩いておったんです。そうしたら新城でそれを憲兵に見つかってですね、軍の物を取ったのは軍法会議に廻るんだと、酷い文句だったですね、住所氏名も言えないといつて。しかしその場合にですね、軍服がそう言わすのか、人そのものがそう言わすのか、もしあの人の家族が居たら、僕にやったあのような態度をするであろうか。ここで僕は人間の心理状態というのが、わからなくなりました。沖繩の人を馬鹿にしているのか、毛布一枚で夜露をしのぐとか雨をしのぐとかして逃げ迷っているのに、そういう言葉が出るのか、友軍というのに、とつくづく感じましたね。

その新城には、五月の二十七日から六月の三日までおりました。機銃の音がしましたので具志頭の仲座へ移動しました。移動は日暮れですね、移動中の道端はですね、大分激しかったんで一般の避難民の死んだ方がたが道端に相当おりましたがね、もうその時分からは無関心です。

だったと思う子供ですが、それが親の上から這い廻って歩くんですね、泣きながら。それには誰も声が無かったですね。助けようと思ってもこつちも心配だし、赤兒なんかどうにもできないですよ。ミルクがあるわけではないし、くれるものが何もないんだから、やっぱし悪いとは思いますが、みんなが見捨てた。波平で、僕等の経験したのはそれぐらいのことだったですね。この赤ん坊の母子は、僕等がぜんぜん知らん人でした。住所も何にもわからぬ。

波平には、八日間おりました。六月十三日まで。波平からは喜屋武に行きました。波平も激しくなって銃声が聞こえましたので、喜屋武の何という部落かわかりませんが、浜近くに泉のあるところでした。そこで畑の中の壕さがして入っていたわけですが、壕が狭いもんだから、うちの家族だけはほかの壕をさがして入っていたわけです。そこで入口に直撃やられた。幸に怪我も何もなかったですよ。そうしてくずれかかっているから、狭くてもいいからといってみんなとっしょになつたわけですよ。やっぱし向こう行つてからも食糧には不自由しなかったんです。昼は出歩いて、食糧をさがして、みんな栄養失調とか何とかは無かったですな。

もうそこではしまいですね、六月の二十一日までそこにおったんです。出るということは、その前から、喜屋武の海ですね、向こうからも呼びますしね、また艦砲もバンバンやるのが見えるし、やっぱし駆逐艦でしたが、兵隊ももう肉眼で見えました。それで二十一日に捕虜になったわけですね、朝です。捕虜になるその前の晩で

したかね、陸地からですね、もう米軍は近くまで来ておっただんです。屋比久先生という方ですね、その方と頑張れるだけ頑張ろうといっておったわけです。

そうしたら翌日は、「出て来い」「出て来い」というのを、男連中は、壕の上にゴロ寝しておりましたから、ぐっすり眠込んでわかなかつたんです。銃声がパンとしたわけです。それで起きて見たら自分の叔父さんが、頭撃たれて即死です。仕方ないので、女子供が先に出て行ったわけです。僕等は捕虜としては最悪条件でなかつたかね。僕等が出たらです、敵の戦車が敷設した爆雷に引っかかってやられたもんですからね。米軍も十四、五名くらいそこで倒れました。それでとても待遇が悪いんです。手を上げて出たら調べるどころか、すぐズボンを引き裂いて、それで上体は裸ですね。体を手であちこちさわって、兵隊が途中までは着剣で、そうして糸満につれられて行かれたんですね。

女連中は座安・伊良波へすぐ連れられて行きましたが、僕と仲田さんといって二人ですね、糸満で、喜屋武方面から負傷した方がたを担架で運んで来ましたが、それをそこで一応下しました。またそこから病院へトラックで運んで行きましたからね、それでその手伝いをさせられたんです。その時に感じたのは、毛色は異っても、呼吸のある人は全部乗せましたね。それだけは敵であつても感心しました。

その晩に座安・伊良波の収容所へ入って、それから翌日だったですかね、家族もいっしょに国頭に向けてトラックで運ばれたわけです。捕虜になるまでの一番苦しかったことといえば、そうですね、苦しいということは普通のようになって超越してしまうてですね、自分等がまだ健康だった関係で、別に苦しいという感じはぜんぜんしなかつたわけです。もう当然のことだと思っていましたから。

喜屋武に行つてからは、僕は食糧さがしには行きませんでした。怪我して歩けないもんですから。それから喜屋武の模様は、あの方が（座談会出席者）はつきりわかるでしょう。

それから、今度の戦争で僕が見たり感じたりしたことや印象に残っていることは、十・十空襲のときですね、ここにいられた軍の方でも、友軍の演習と思つたわけです。それでみんな出ちやつたわけですね。そうして見ていたんです。うちの叔母さんに当る人が、水汲みに行つて、飛行機の飛び廻っているのを見ていたら機銃でやられたんですよ。それではじめてこれは実戦だとわかつたわけですよ。実戦だとわかつたもんですから、みんな壕に避難してもう面倒見る人がひとりもないんです。西原の翁長には陸軍病院の分院があつたんです。だからそこで連れて行くのに、その日は一日中ずっと空襲しつづけでしたよ。だから行く人がいなくて頼まれないわけです。もうやられていっているものは仕方がない、放っておけと。だがこっちは、叔母さんですから、それで役所へ行って連絡したんですよ。そうしたら、今日からはこっちはどうにもならないから翁長の陸軍病院の分院に行つて下さい、といったわけです。それで僕が帰つて行く時は、飛行機は空いっばいなんです。ようやく帰つて来てから、その時、隣りの青年で田場セイケンというのがおつただんです。

です。女たちは石川に下して、男たちは久志の祖慶といいますが、向こうへ収容されたんです。家族とひき離されたわけでした。そこにて向こうからまた石川に、家族のもとに。それから西原へ来たわけです。

捕虜になる時は、何ともなかつたですね、何とでもなれ、殺されるならどこでも同じことだと、もう肝をすえておりました。

しかしいっしょにいた人、田場さんですね、もう大変だから逃げよう逃げよう、というんですが、いや逃げたら一コロだから、もうどっちも同じやられるのであつたら、出たらいいじゃないかと、度胸はきまっています。だからあのおう、出る瞬間がですね、何ともいえぬ不安があるんですが、出てしもうたら何でもありません、成るようにしか成らんと。

生きると思つたのは、糸満で重傷患者も乗せている。それを見て、これじゃ殺さないな、とそこではじめてほっとしました。それまでは途中でもやられるかしれんと思ひました。それが輸送の途中ですね、自分等は糸満でもつてやっぱし重傷患者を車に乗せてやつたんですが、食べ物僕等には配給されないわけです。だから朝からその一日何にも食べない。翌朝も食べる物はなかつたですね。そのまま国頭まで運ばれたもんだから、もうあれですね、一番避難中で辛かつたのはその時でした。希げ頭は陽に照らされればなしでしょう、現に祖慶に着いた晩には、水も飲むことができなかつた。腹に一物もない。弾の中をぐる場合にも、こんな感じはなかつた。捕虜になつた時はその一日だけでも大変でした。もう一番苦しかったです。

今度の戦争で亡くなつたんですが、あれと僕ともう一人、山内宗盛と三人で、戸板に乗せて担いで行くとき低空で、ジャンジャン・ジャンジャンやるんですよ。こうして行つたんですがね、壕に行くまでに亡くなつたんです。

それから僕の弟、五男はまだ数え年二十歳でしたが、現役召集取られて、甲種の合格。僕が付き添いで入隊させたが、もうそれっきりですね。戦死はどこでしたのか、それをはつきりしなせん。

それから一番印象に残るのは三男が満州に召集されて行つてですね、満州から南方へ移動してあれもどこで亡くなつたかわからんです。あの場合は妻もおつて、子供一人は妻の腹の中にいたわけです。あと取りができましたから、思い出すといふよりあきらめの方が早くなつてしまふんです。一番この五男（弟）ですね、こんな西も東もまだわからん。その時分はきびしくて、これは青年らしい生活というのは送つたことはなかつたんです。そうして自分がよくやく生活も安定し、こういう生活をしていると、一番それがあきらめられないんです。この戦争さえなかつたら、今頃は互に笑い合つて、生活もして行きおつたが、散るにはあまりに早かつた、と。だから一番それが気になつている。五男で末でもあつたし、僕とは年齢の差も大きかつたからかもしらないが、その点が一番念頭に残つておる。

喜屋武 ウシ(四十一歳) 主婦

四月三十日、自分の壕であつたが、兵隊に追い出された。島尻か

ら兵隊(友軍)がやって来たから、「ここは隣組の壕であるから、そこへいさせてくれよ」といったがきかないんだね。「お前たちが戦きをするのか」といって追い出された。それですぐ八重瀬岳に行っているんだよ。行った道は、宮平(南風原村)の部落に入るに兼城・宮平、田圃へ道があるだろう、すぐ大きな道を通って、弾をよけて隠れたりして、わたしたちは池田からは五時にたつて、夜遅く、八重瀬には着いたんだ。途中人が死んでいるのは沢山おったよ、道にも道端にも。

八重瀬岳では、岩に茅で飯小屋をつくっていたから長い間いただらう。しかしこっちで上から石油ドラム罐落されてね、わたしたちのところは焼けはしなかったが、隣りは全部焼けてねえ、わたしたちは着のみ着のままになったよ。食べ物もすべて焼かれて、着る物も焼かれて、わたしたちがいるところには、いっしょに友軍の兵隊たちもおったよ。そこには、十日ばかりいたのではなかったかね。

註、この八重瀬岳に米軍飛行機がガソリンを撒いて焼くことは、同じ西原村の池田の隣り部落桃原の喜屋武美則さんの記録に委しく出ている。喜屋武ウシさんのそれも同じことのように推察される。

八重瀬岳からは新城へ。新城では壕に入っているんだがね、雨が降って、壕に水がいっぱい溜っておられなくなって、人の家の離れに入っただ。あそこで五月三十日に十四になる四男が爆風でケイ目失してよー(ケイは簡単な意味があり、「目失」＝まうすは古事記の言葉が現在は沖縄方言のようになって違われている)、そ

と話し合っていたのだよ。

註、そこでまた島袋さん言葉をはさむ。「わたしたちはねえまた、山はクワラ、クワラ、クワラ、クワラ火をつけて燃やすし、男たちはみんな裸にする、女たちはそのまま歩かすから、その山で燃やすんだと思っただよ」。

伊原では孫が死んだが、それは栄養失調、子供は泣くので皆に叱られてですね、何をくれたのか下痢させましてね。子供が叫ぶと、この子供どこかに持って行けよといって叱りましたもの。叱るのは民間の人たちだった。民間の人たちが、この子供一人のためにみんな殺させるよといって怒鳴りましたからね。これはちっとも声出さしめるなよ、何か食べるものをくれて、と嫁に言っていたが、何をくれたか下痢させて、薬といっは無いのだから、長らく下痢して。いっしょにいる人たちが子供が泣くと弾落されるといってですよ。その時のもつとも気の毒なものは持ちちでありましたでしょうね、(島袋さん発言 子持ちと年寄よ)。お乳といっでもないのでしたし、食べるものもなかったのですから。

家族は、九名から二人はあの時に亡くなって、兵隊に行っているのと、お父さんも合して四人亡くなっておるんだね。現地召集された長男は現役で石部隊、西原学校へ入隊、沖縄戦で戦死しました。どこで亡くなったかわかりません。お父さんは南方軍で、南方はどこかわかりません。マーシャル群島に行っていたというほかの人からの話は聞いていますが。当時次男は十八になっていました。三男は十六になっておりました。四男は新城で爆風にやられました。五男は、みんな二つおき三つおきですから、六男、七男全部男だけで

ここにその四男を葬ったが、その時、いっしょにやられた人が壕のいっばい、寝たように爆風でやられていたよ。ほかにあちこちに大勢亡くなった人があったんだと思うがね、恐くてどこも見られなかったよ。あんまり激しいので新城にはおれないといっ、新垣に行った、真壁・新垣に。新垣には四、五日はいたかね、あっちの激しいことは、それはもう大変であった。もうそこにはおれないのにといって、また伊原というところへ。新垣を出たのは日が暮れからだね、夜でなければ歩けないんだよ。恐くておびえて歩くのだから、途中のようすなんか何も見ることはできないのだよ。

伊原には長いこといたね、新暦の二十五日(?) (六月)頃までここにいたのではなかったかね、山羊小屋に坐り込んだ。行っつききは二、三日激しかったが、後は弾が落ちなくてよかったんだ。伊原からは大渡・米須になっているのではないかね、馬小屋で一晩明かしたからね、もう夜が明けているもの、といっ歩いて歩き出したよ。歩いているとアメリカに捕虜取られてしまったんだね、摩文仁で、二十一日に。歩いておるとアメリカは捕虜取るんだね、とても大勢の人だったんだよ、どうして同じところにいるのにいっしょにならなかったかね。

註、島袋カミさんに呼びかける。それで島袋さんが、お前(方言で「ヤー」)も座安・伊良波に行ったのかときく、「はい、座安・伊良波に連れられて行きました、五時頃に、五時頃にしか座安・伊良波には行きませんでしたよ」の問答。

十時すぎに捕虜はとられたんだよ。その時の気持は、アメリカ人は戦車持って来ておったから、みんな戦車で轢き殺すだろうなあ、

ありました。長男の嫁と孫と、その時はいっしょでありました。伊原で亡くなった孫は男の子でした。嫁は、今は離縁しました。

註、子供を失い、夫が現役としての現地召集からとうとう帰らなかつたので、離縁するほかなかつたのだらう。

八重瀬岳では兄弟たちみんな二十人ばかりでしたが、八重瀬が焼かれたので、そこで家族だけ九人別れました。

#### 田場 ウシ(三十九歳) 主婦

池田から歩き出して、大名(南風原村)から真和志の司令部の壕に行った。司令部の壕では散弾が激しくて、また男は兵隊たちが来て、道案内しなさいといっ、いっしょに連れて行くといったら、こっちは逃げなければ大変、これだけの子供をわたしひとりではどうにもならないからといっ、試験場へ歩いてるんだよ。多分ヤマト(他の都道府県)の兵隊だったんだね。田場さん道案内をして、顔を出したんだが、沖縄の兵隊なら道は知っておるから、そういうわけで司令部の壕から試験場の方へ行って、相思樹の中におった。

食糧は持つておるが、煮るところがない、子供たちをひもじくさせてもいけない。それで試験場の建物へ行けば、何かないかといっ、男たちがそこへ行ったら、お肉なども煮てあったので、鍋ごと持つて来てあった。湯沸しも持つて来てあった。そのアルマイトの湯沸しは、わたしたちつい最近までつかっていたよ。またお釜

は穴があいたからガジマル小を植えてあるよ。そう、あれもあつちからのものだよ。試験場には可なり長らくおつたよ。

試験場から東風平に行ったが、東風平には松山があった。そこに二日くらいおつた。そこから第二与座へ。歩く時は夜しか歩かない。星歩く時は、飛行機が弾を落さない時に。第二与座へ行った時までは、甘蔗持って来て、釜で煮たんだよ。こつちを出てから艦砲は追っかけて来るように来おつたんだ。与座までは大したことはないかった。

そこでも捜す人が来るから、砂糖小屋の籠かごの中に入れた。小さい兄さんから聲からわたしたちのお父さんも。友軍の兵隊が弾運ばしたり、何かさせるために連れに来るんだよ。歩く先さきそうだから、あちへ行ったり、こつちへ越えたりして、逃げるわけ。また東風平へ行った。壕もあったが、しかしそこにパーラパーラ弾が来るんだよ。それで糸満へ行った。糸満では人の家にいた。糸満から出て名城に行く時、道端に、人の手の中から出ておるのや、畑に兵隊が背囊をはいたまま死んでいたりそんなものを見たよ。もうその時にはびっくりしたよ。その後からは、人を踏んで歩くくらい平気になっていた。

それから名城に行った。その時からは激しくなつて二、三日しかそこにはいなかった。その時激しかったが、みんな無難だった。わたしたちのおばあさんは八十二歳になられたが、甘蔗折つて来て上げると、それを自分の歯で皮をむいて、上つたよ。

名城では激しくおれないので喜屋武に。喜屋武でもまたおれない

わたしは、これだけの子供をつれて、もう恐くて体が慄えて、三人をそのまま放つたらかして、そこから出たら「乗れ」といって車に乗せられた。アメリカの兵隊は、「おいで、おいで」して、パンを食べろと渡された。食べなかつたら、食べよ、といった具合で、少し引きちぎつて自分で食べてから、「食べよ」といってくれた。わたしたちのテイキチはまだ子供でしたが、もう恐がつて、殺されるかと思つてよ、大麥だと思つてよ、自分が持つてゐる、しやぶつて唾のついた黒砂糖を、兵隊の前へさし出して、ハイ、ハイ(さあ、さあ)といった意味の方言(さあ、さあ)を、食べれ、食べれ(笑う)やつた。そうすれば何もしないだろうと思つて(笑いな)子供もこんなふうであつたよ。捕虜されてからは、野嵩へ行ったよ。

お父さんがそうなつたからわたしは小さい子供たちをつれて、だろ、八十二歳なられる方は疲れていられるよ。放つたらかしてゐるわけだよ。年寄り(老人)と子供は、その時はカーンカーン(能力がなければ力がなければ)放つたらかすんだね。それで、出て、自分で杖ついで歩いていたので、甥に行き合つたんだね。軍人に行つておつたそのおじさんが背負つてお連れしておるわけ。怪我されておられたが、喜屋武から名城まではわたしたちのお父さんが元氣だから、自分の母親だから背負つてお伴した。わたしたちのお父さんが名城でやられただろ、まあ、そこでやられたから、わたしたちにはその後おばあさんを見るのができないよ。わたしたちのおばあさまでも、自分の親でも、自分の体を持つのも難かしいのだから、もう、どうにもできないよ。そうして、この方は

い、また戻る。この方たち(野国さん)は、さあ戻りましようといつても、戻らないわけよ(野国さん発言)、「わたしたちの兄さんはね、どこにいても同じだから戻らない」といつてね)。それでわたしたちは、こんな大勢の子供たちだから、また年寄りもいっしょだから、戻りましようね。死ぬならみんないっしょにひとところ死ぬ方がいといつて、戻つてまた名城に来てる。名城の浜辺に阿檀林があつたよ。あつち(海岸沿に見える所)塩をたく与根だよ、といつていた。わたしたちがおつたところは海岸端であつたもの。そこに墓があつたよ、亀甲墓が。その墓の後に、高い阿檀林があるわけだよ。みんなそこに住んでおつた。お婆さんはお歩きになれないから、人の家に入って貰つたよ。お婆さんお一人だよ。お食事は、煮て持つて行つて上げていた。

それで墓は陣地と思つたのか、これに爆弾を落していたが、わたしたちのお父さんは、胸をやられてしまった。また田場の兄さんの娘は横になつて子供に乳をやつていた。それはどうしてやられたのか死んだが、この子供は元氣だつたよ。しかしこの子供は、捕虜になつて北部へ行つてから栄養不良になつて死んだ。妹だが、兄さんたちといっしょに歩く方がいといつて、いっしょに歩いたが、聲さんも、三人ここでいっしょにやられたよ。三人は直撃うけて、わたしたちはくついているのだが、どうもなかつた。この子供は数えて三つくらいになつていたが、母親が横になつて乳をくれていた。その時母親はやられたのに子供は何でもなかつた。墓に当た弾の破片が飛んで来たのだ。乳をやつていた母親の夫は羊を煮てくれようといつてゐるところだつたよ。

家に寝かしてあるのだから、自然に何とかなつて、放つたらかして行つたわけ。だからこの方も、杖をついて出たわけよ。出たから、前の目つちから叔父さんが見て、背負つてお連れして行つたわけだよ。糸満まで。亡くなつたのはコザまで行かれてから。

わたしたちのお父さんもやられた時、前にわたしが村長証明を苦労して貰つて、那覇の街に行つて買つて、ただ一度だけつけた上着をおおい被せて、わたしたちは出たんだよ。遺骨なんかあるもんかよ。わたしはみんな子供ばかりつれて、六つになる子は負ぶつてしか歩けないだろう。仕方ないよ、それでこつちへ移動して来てから、伊良皆(屋号)、親戚がね、まあそのまましておいてはいけないから、遺骨があつたら取つて来てお墓に納めて、なかつたら石を持つて来て、たましい霊を伴れて来ようよ、伊良皆の兄さんがおつちやつたので行つたが、遺骨はないよ、魂をお伴して来た。

わたしたちは野嵩にしかないだろう。おばあさまのことは、反対方向でしかないよねえ、だからお亡くなりになつたそうだということ、人からしか聞かないよ。葬つたのを小波津の方が知つておるといふ、あなた方、霊をお伴されるならわたしが案内して上げるといわれてから、お坊さんは、わたしたちの親戚だろう、それで霊をお伴して来たわけだよ。亡くなつたわけはわからないが、栄養失調だつたかもしれないね。何時頃ということもわからない。

註、十二、三歳以下の子供四人をつれて女手一つで、捕虜生活から、ずつと生き抜いて来られた苦勞は並大抵ではなかつたと推察されるのであつたが、それは割愛した。